幻のガシャモクの出現

斉藤吉永

ガシャモク（ヒルムシロ科）*Potamogeton dentatus* Hagstr. は、中野治房博士が学生時代に千葉県で2番目に大きい沼である手賀沼で採集したものを牧野富太郎博士が *P. teganumaensis* Makino として発表したのが日本で最初であろう。後に、すでに外国で採集されたものに学名が付されて発表済みであることが判って現在の学名に変わった。利根川水系や琵琶湖等に自生することが知られて来たが、自生地の水が汚染されて次々と姿を消してしまった。

最近の信頼すべき文献として1989年に発刊された『我が国における保護上重要な植物種の現状』（日本自然保護協会・世界自然保護基金日本委員会等による出版）によれば霞ケ浦、印旛沼、琵琶湖は絶滅と見られ、福岡県のお糸池、群馬県内、中国の山東省に現存すると思われている。他の日本の文献でも外国の産地として中国の青島が記載されているので中国の文献である『中国水生高等植物図鑑』（顔素珠編著）に当たって見ると『光叶眼子菜』*Potamogeton lucens* Linn. というのがある。中国では広く産するらしく大きく4つの地方に分布すると記している。

同書の図も日本産のガシャモクの概念と少し違うが、牧野富太郎博士もガシャモクを本種の変種とした事があって *P. lucens* var. *teganumaensis* Makino とした時代があった。光叶眼子菜とガシャモクが同一のものであるのか否かは識者の御教示を得たいが、本年（1990. 9. 11）千葉県我孫子市役所の環境部の職員が筆者を尋ねてきて、休耕田に掘られた溝にガシャモクらしきものが生えているので見てくれるようにとの依頼があり、同月13日に現地を訪れて見た。

休耕田となっていた場所に長さ約50m、巾が5－6m、深さが約1m程のゆるいS字形の溝が掘られ数年は経ているだろうか、周囲にはカヤツリグサ科のコゴメガヤツリ、ウシクグ、アゼガヤツリ、ヒナガヤツリにヌマガヤツリ、カンエンガヤツリ、イネ科のイヌビエ、クマビエ、オオクサキビが密生し溝の斜面にはアメリカアゼナ、ミズワラビも多かった。

溝の中にはガシャモク、セキショウモ、ミズオオバコ、オオミズオオバコ、フラスコモが見られ標本用に若干の個体を採集した。

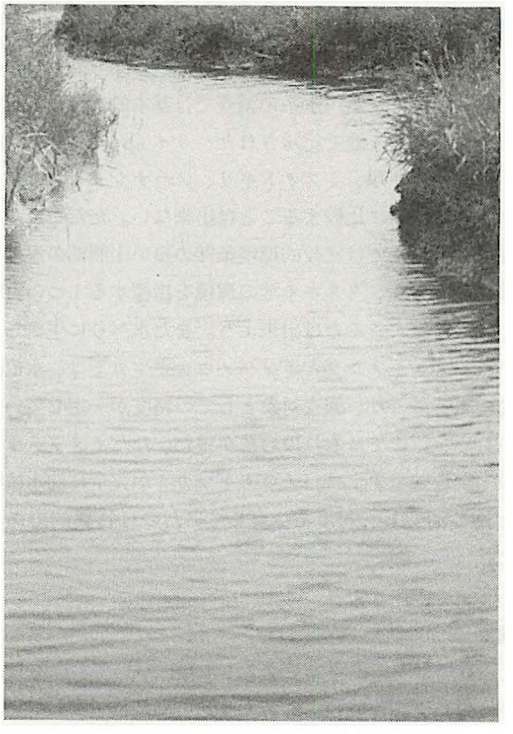

写真1．ガシャモク発生地

帰宅後調べて見ると葉の形が前記中国の図鑑に図示されている光叶眼子菜に近いものもあることを知った。牧野博士も多分こうした標品に基いてガシャモクをこの変種としたのであろうと思っている。

標本に仕上げて神戸大学角野博士に同定をお願いしたところガシャモクであるとの結果を得た。聞くところによると現地は1991年の3月末までに公園として整備するというので同月22日再度現地を訪れ8㎜に記録しておいた。

同地はすでに本会の大滝末男氏が採集され植栽してガシャモクであるという私信も頂いたが、ともかく日本から消えかかっていたガシャモクが出現したのである。

写真2．ガシャモク
写真3．ガシャモクの花穂
写真4．ガシャモクの陸生型

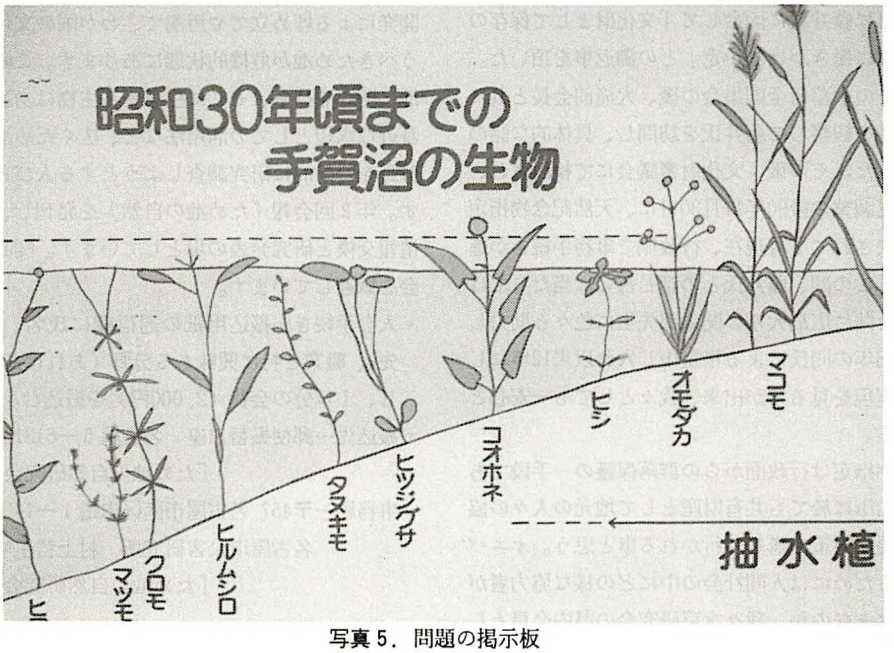

写真5．問題の掲示板

8㎜の撮影中近所に住むという老婦人が孫だという幼い女の子を連れて見物に来ていたが、この休耕田についてお尋ねすると沼の1部を水田にして40余年は経過しているという。ガシャモクの種子か地下茎が沼にうずもれながら生きながらえて溝が掘られて復活したわけである。

尚ある文献によればガシャモクは『ササバモの様に陸生型になることはない』とあるが、我孫子市高野山新田の休耕田の中の溝では陸生型があった（写真参照）。亦この文献にガシャモクの写真があって印旛沼での撮影となっているが、6年前に同じ編者による別の出版社から発刊された図鑑では同じ写真に茨城県霞が浦での撮影となっている。どちらが正しい産地なのか不思議である。

ともあれ、ガシャモクの出現を報告しておきたい。当標本の同定を賜った角野康郎博士に感謝申しあげる次第である。

このガシャモク自生地に近い場所に公共の掲示板（或いは説明板か？）があって日本の有名な学者のスケッチを基にパネルに仕上げて動植物を図示してある（昭和30年頃までの手賀沼の生物）。スケッチは仲々のものであるが植物について余り注意を払っていないような気がしてならない。タヌキモ、コオホネ、オモダカ、マコモ等如何でしょう。 (1990. 11. 15)

千塚池（福山市）のオニバス天然記念物指定へ

橋本　卓三

千塚池は現在、広島県でほとんど唯一のオニバス群生地と思われるが、このたび市の天然記念物に指定される運びとなった。これについては福山市文化財保護委員の藤井茂美先生（元、広島大学福山分校主事）に多大の御骨折りを賜り、ここにあつく御礼申し上げるしだいです。

事の経過を述べると、1988年8月から翌年2月にかけて水草研究会の大滝前会長と筆者の間で意見の交換があり、3月21日に藤井氏に面会して「文化財として保存の方向で担当課に働きかける予定」との御返事を頂いた。7月、松江での水草研全国集会の後、大滝前会長と共に31日、千塚池を観察して藤井氏を訪問し、具体的な話の詰めを行なった。その後、文化財審議会にて検討され、地元との意見調整の後90年11月30日に、天然記念物指定の意向が採決されて2月現在、行政側で事務手続きが進行中である。この間、藤井氏との話し合いに当たっては大滝前会長と共に広島大学の関太郎先生に色々と助力して頂いた。78年の同氏による指定申し入れ以来12年にしてようやく実現を見る事が出来、我々としても一安心と言う所である。

天然記念物指定は行政面からの群落保護の一手段であり、今後福山市に於ても共有財産として地元の人々の協力を得て必要な対策を講じて行かれる事と思う。オニバスが生き残るためには人間社会の中にどの様な協力者が組織されるべきなのか、我々水草研究会の県内会員としても独自な立場から継続的に注目して行きたいと思う。この種の事については地方特有の気質、意識とか複雑な事情があってなかなか大変であり、担当行政局の中に興味と熱意を持った特定の人が居るかどうかが要点となる。筆者に取っても大変に勉強となった。

「ため池の自然研究会」の紹介

ため池は人里近くにあり、昔から人びとの生活と深いかかわりを持ってきました。農家の集落と水田、ため池、里山が一体となった風景は、私達が心に抱くふるさとの原風景だと思います。しかし、近年、都市周辺では、開発による埋め立てや汚濁で、わが国の文化遺産ともいうべきため池が危機的状態にあります。このようなため池に関心を持ち、そこに生息する生物は勿論、水環境、身近な水辺としての活用法など、広くため池にかかわる分野を科学的に研究調査しようとする人びとの研究会です。年2回会報「ため池の自然」を発刊し、会員相互の情報交換と研究発表の場としています。関心ある方の入会を歓迎しています。

- 入会手続き…振込用紙の通信欄に氏名、住所（連絡先）、職業と特に興味ある分野（あれば記入）を記入し、1年分の会費（2,000円）を振込む。
- 振込先…郵便振替口座　名古屋5―61818
  「ため池の自然研究会」
- 事務局…〒457 名古屋市南区忠道1―14
  名古屋市公害研究所　村上哲生気付
  「ため池の自然研究会」

（浜島繁隆）